

令和5年度 山形県立荒砥高等学校 学校評価書

自己評価 達成度 5:きわめて達成度が高い、4:概ね達成できた、3:できた、できないが半々くらい、2:達成できないことの方が多い、1:ほとんど達成できなかった				次年度に向けて		
重点目標	具体的目標	達成指標や方策など	達成状況	達成度		
1 「信頼され、前進する荒高生」の育成	① 自他の「いのち」を大切に、いじめのない、心身ともに健康な生徒を育てる。	・いじめや体罰のない学校づくりのために、年3回の実態調査を実施し、適時の指導に努める。 ・悩みや問題を一人で抱えることのないように、面談を適宜実施し、相談しやすい環境づくりに努める。 ・生徒会の「あいさつ運動」「リスペクト運動」や委員会の活動を通して、良好な人間関係づくりに進める。	○年2回の面談週間以外にも、心配な生徒には面談、家庭訪問を実施し、相談しやすい環境づくりに努めた。また、教員間の情報共有が迅速に行われ、早期に対応することができた。 ○いじめや体罰のない学校づくりのための実態調査を年間計画通りに実施し、スピード感を大切に指導に取り組んだ。 ○生徒会を中心に様々な活動に積極的に取り組むことができた。保健委員会の「献血メッセージ」「モニタープロジェクト」「保健指導」「クリスマスエール」など思いやりを根付かせるような企画を実施し9割の生徒が日常でも人に優しくする行動を心がけよう意識をもってくれた。 △生徒会と生活・HR委員会で「あいさつ運動」や「リスペクト運動」に取り組んでいるが、あいさつを自分から進んでできる生徒が減少している。 △様々なものを抱えた生徒が非常に多く、また幼い言動をする生徒も一定数おり、その都度丁寧に説明や指導を行ったが対応に苦慮する場面もあった。	3.8	・いじめの年2回調査と面談週間や細やかな担任面談を通して生徒の実態把握に努める。 ・面談や情報共有の継続	
	② 「凡事徹底」の下、基本的な生活習慣を確立させ、自律と自立ができる生徒を育てる。	・さくら連絡網を利用した「健康チェック」を徹底し、自己管理能力を高める。また、生徒の状況を早期に把握し、問題等があれば、保護者と連携しながら対処する体制を整える。 ・「当たり前のことが当たり前」できるように、年次やクラスの指導を充実させ、自律心、自立心を養う。 ・生徒会が中心となって服装やマナー遵守を呼びかけ、違反0を目指す。	○クロムブックにさくら連絡網のアプリをインストールし、容量不足や登校前の健康観察の入力忘れの対応を行ない僅かだが入力が増加した。 ○生徒会活動、委員会活動、部活動等を通して積極的に取り組む場面が見られ、自律心、自立心を養うことができた。 ○生活・HR委員を中心とした服装・身だしなみ点検を計画どおり実施し、学校生活における服装やマナーが守られている。 △生活習慣の乱れや体調不良等や健康管理の拙さ等により、欠席・遅刻・早退がかさんでしまう生徒も見られた。	○健康管理、登校日数などについて家庭との連携を強化しなければならない。	3.6	
	③ 授業を第一に基礎学力を定着させ、発展的な学習にも主体的に取り組む生徒を育てる。	・全年次とも朝学習を定着させて基礎学力を養い、授業に向かう姿勢を高める。 ・教科・年次で連携し、課題提出100%を達成させる。 ・総合学科の特徴を活かした上位層への指導の充実を図る。また、進路希望に応じた個別指導を充実させる。	○今年度、教務課で一括して朝学習の配信を行っていたが、落ち着いた1日を始めるための良い習慣となっている。 ○早い時期に進路目標を明確にさせ、実現のための指導を行うことができた。学校全体に個別指導をお願いできたことが良かった。生徒の進路希望実現に繋がった。 △朝学習で学習に向かう姿勢を涵養することができている反面、クロムブックの準備不足で、取り組めていない生徒もいた。 △学校全体として上位層を伸ばすとともに基礎学力を定着させる手立て・体制づくりや研究を進めることが必要。また、家庭学習が不十分で、基礎学力が未定着である。 △課題の提出率は概ね良好だが、固定化された提出できない生徒へは個別対応しながら提出できるように促した。	・上位層に向けた宿題をスタディサプリから配信するなど個に対応した指導のあり方を研究する。 ・書写や自分の考えをまとめる等、クロムブック以外の朝学習を取り入れながら、基礎学力の定着を図っていく。	3.4	
	④ 特別活動、部活動、資格取得等に積極的に取り組み、自己実現をめざす生徒を育てる。	・年次ボランティアの他にも自主的に1回以上のボランティアに参加する。 ・生徒会活動や学校行事等の特別活動に積極的に取り組ませる。 ・漢字検定、実用英語技能検定、数学検定、ビジネス文書実務検定、情報処理検定等の検定試に積極的に挑戦させる。	○ボランティアの参加について1年次の積極的な参加が見られた。1回以上参加することを目標にすることを周知し、コロナ以前の積極的な参加を目指す。 ○JRC永年加盟校として地域ボランティアや献血広報などを評価され日本赤十字社より表彰を受けた。 ○今年度よりボランティアの申し込みを事業者と直接行うことにより、ボランティア担当の業務が軽減された。(一方で、生徒の参加状況が把握しづらくなった) ○学校行事の運営は生徒会執行部を中心に実行し、成果を上げることができた。 △検定試験に挑戦する生徒が少なかった。受験を積極的に促す必要があった。	・全校でボランティア活動に従事することを継続する。 ・学校目標にボランティアの参加目標を明示したり、検定試験等の情報を伝え、積極的な参加を促す。	3.5	
2 魅力ある学校の創造	① 生徒の個性を伸長し、一人ひとりが活躍の場を得て輝く教育活動を推進する。	・生徒の特性を把握・共有してその個性の伸長を図るとともに、外部専門家とも連携した個別支援の体制を充実させる。 ・授業や特別活動等において生徒一人一人が活躍できる場面を設けて、感性豊かで心身ともに逞しい生徒の育成を図る。	○通級や学習会、学習支援員の配置等、個別指導が充実し、取り残さない指導が実現できている。 ○スクールカウンセラーなどのアドバイスを職員間で共有し、生徒の特性や状況を把握した上で指導に当たることができている。 ○生徒の特性理解のためSC、SSW、養護学校、医療等、外部機関や外部専門家とも連携を取りながら情報共有や個別指導を展開した。 ○就業体験活動の充実とともに、1年次において「町内産業魅力発見ツアー」を実施し、地域産業への興味関心を高め、働く意義の学びを深められた機会となった。 ○40人の1年次生で行う「教養基礎」は初めてで、どのように進めていくか試行錯誤が必要だったが、担当教員や支援員の先生方の総かり体制での指導により、基礎学力の向上につながった。 △基礎学力が圧倒的に低い生徒も多く、人手がもっと必要だと思われる。(教養基礎に関して)	4.0	・社会に出たときに自立できるような指導も段階的に行っていく。 ・進路実現のために外部の方からの専門的知見を今後ともいただきたい。 ・1年次生が30人を超えるときは教養基礎を担当する支援員の先生や教員を増やす。	
	② キャリア教育の充実を図り、進路目標の達成を目指す指導を行う。	・産業社会と人間、総合的な探究の時間、特別活動において一貫したキャリア学習を進め、生徒の自己理解と進路意識を深めさせる。 ・教科担当者・年次団を中心に、進路意識の高揚と目標維持に努め、資格取得や外部検定試験等への挑戦を促す。 ・就職・進学両面のきめ細やかな指導体制を構築し、生徒一人ひとりの希望の実現を目指す。	○「産業社会と人間」や「総合的な探究の時間」などを全職員で分担する体制ができつつあり、生徒の全人的な育成につながっている。 ○年次を中心に就職進学とともに希望に応じた指導を実施した結果、12月上旬までにほとんどの生徒が希望を達成できた。 ○科目選択は一人一人に丁寧な面談しながら円滑に進めることができた。また、1年次5月の面談以降も変更が可能になったのはよかった。(1年次5月では進路希望が変動しうる時期であるし、定期試験を一度も受けておらず学力も担任が把握していないため。) ○課題探究を通して、自己の問題意識を持って課題の解決策を考えることで、主体的に学習に取り組む姿勢を養うことができた。 △1年次からの進路に対する意識やそれに伴う学習に対する意欲が薄い。自己を理解し適切に進路選択するような指導計画が必要である。	・進路意識の醸成を年次ごとの目標に基づき計画を立て、指導することも必要ではないかと考える。 ・課題探究活動の方法と内容を今後とも検討していく。	3.4	
	③ 授業改善やICT機器活用により、学力向上や探究型学習の充実を図る。	・校内授業公開週間や公開授業研究を通して、主体的・対話的な学びを意識した授業方法を研究・実践していく。 ・ICTの効果的な活用方法の研修を深め、協働的・探究的な学びを推進する。 ・年2回授業評価を実施し、PDCAサイクルによる授業改善を進める。	○校内授業公開週間や公開授業研究で自校や他校の先生、外部の方への参観していただいたことで授業改善の機運が高まった。 ○生徒の授業評価を基に、授業方法の改善に向けて取り組んだ。 ○教師、生徒と一人一台端末があることで、ICTを用いた授業が浸透してきている。 ○chromebookを効果的に使い、就業体験や白鷹町内魅力発見バスツアーの発表会をスムーズに実施することができた。 ○生徒一人一台端末があることで、操作も上達し、教科授業だけでなく、就業体験、探究学習活動、修学旅行の事前学習などICTを効果的に活用できた。		4.2	
	④ 教育課程の具現化とキャンパス制の効果的な運営を行う。	・教育課程を円滑、かつ効果的に運用し、授業改善を進め、学習効果を高める。 ・系列の特徴を生かし、生徒個々の進路目標の実現に向けた適切な科目選択を進める。 ・「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」の内容を次年度以降に向けて改善を図る。 ・日常の活動をキャンパス制の視点で見直し、互いのメリットとなるよう積極的な活用を行う。	○教員全体で授業を工夫して興味・関心を高め生徒の学力向上に努めようとする前向きな雰囲気がある。 ○コロナによる規制が緩和され、互いの文化祭視察やフラワー長井線車両清掃ボランティアを通して交流を図ることができた。 ○キャンパス制事業では、5月の交流学習、文化祭視察、フラワー長井線清掃ボランティアなど交流する場を設けることができた。 △「産業社会と人間」では地元企業の見学とまとめ、発表等を通して生徒の地元地域への意識を高めることができたが、やや過密日程で、体調を崩す生徒もみられた。	・白鷹町内魅力発見バスツアーの日程を見直していきたい。 ・教科と年次の連携を図りながら、さらに指導方法の充実を図る。 ・キャンパス制のあり方について検討を行う。	3.7	
3 地域と連携した特色ある教育	① 地域貢献活動や地域との連携・交流に積極的に取り組み、地域の理解と支援を得る。	・地域の行事やボランティア等の機会を創出し、地域との交流を一層推進する。	○生徒保健委員会活動の一環として地域健康活動の健紅マイレージに全年次が参加した。 ○献血広報を継続し、献血対象者の40%が希望してくれた。当日は11名の協力をいただいた。 ○紅花摘み全校ボランティアやフラワー長井線車両清掃、その他のボランティア、産業まつりへの参加等を通して、地域貢献の意識を高めることができた。 ○家庭環境が厳しい生徒にSSWに関わっていただき、社会との接点を保っていただいた。 ○教育支援員の先生方を頼りにしている生徒が多く、授業時に安心して臨むことができ、学習意欲の向上につながった。	3.9		
	② 地域の教育資源を活用して、総合学科としての特色ある教育活動を推進する。	・教育活動全般を通して地域の産業や文化に触れ、地域の外部人材を活用しながら教育活動の充実を図る。	○様々な地域の外部人材に協力していただき教科、探究学習等では地域理解を深めることができた。 ○「産業社会と人間」において、地域の産業・文化に触れる機会を創出し、大変有意義であった。 ○町のオーストラリア研修に中学生と共に参加した。町での発表の後に校内でも発表し、全校生が異文化に触れることができた。 ○就業体験、探究学習活動を通して地域の産業・文化に触れ、地域理解が深まった。 △交流を深める場づくりの設定が必要。	・地域の方々と交流できる時間、予算の確保が必要である。 ・外部との連携を更に密にする。	4.1	
	③ 学校運営協議会、荒砥高校魅力化協議会と連携し、学校の魅力化、活性化を図る。	・学校運営協議会や荒砥高校魅力化協議会において学校魅力化・活性化策を検討し、その事業を確実に実施する。具体的には、就業体験活動の充実、地域課題解決型学習の推進、中学校との交流、高校魅力化コーディネーターとの連携等により、魅力化・活性化を一層推進する。	○小規模校サミットに参加し、全国の小規模校との交流と情報を交換することができた。 ○部活動スキルアップ事業を通して、地域型総合スポーツクラブ(ロック)と連携し、中学校との交流を実施することができた。 △2年次生の探究テーマの決定が就業体験実施後になってしまい、両者をうまく連携させて生徒の進路意識を高めることができなかった。	・探究活動の年間計画を見直し、他の活動と効果的に連携できるようにしていく。	3.8	
	④ 中学生・保護者・地域に、教育活動の成果を積極的に情報発信する。	・1日体験入学や中学校進路学習会において、生徒を前面に出したPR活動を展開する。 ・ホームページやSNS、広報誌「かわら版」やマスコミ、コミュニティセンターや中学校でのポスター掲示等を活用し、教育活動や成果などを広く情報発信する。	○1日体験入学や、中学校進路学習会では、実際に意欲的に学校生活を送っている生徒が直接中学生に伝えることで魅力あるPR活動になっている。 ○1日体験入学や中学校進路学習会では、2、3年次生の生徒会が中心となってPR活動を行うことができた。		4.2	
学校関係者評価	<p>・生徒に即して考えると、学力と共に社会とつながる力の育成が大切と感じる。具体的には「地域と連携した特色ある教育」の評価を上げていく必要があるのではないか。今後も生徒負担に配慮しながら、ボランティアなど人と関わる活動を意図的に進めていくことが、生徒の力を高めることになると感じる。</p> <p>・社会福祉協議会としての取り組みと連動する「ボランティア活動」について、さらなる理解と協力をお願いしたい。</p> <p>・育成と創造と地域連携は、いずれも高次元の目標と感じられるが、外部に発信し、ともに取り組み向上するためには、同じ目線で様々な課題を検証することは大切なことと思われた。</p> <p>・実際に体験したり参加したりした項目は高い評価に結びついているように感じる。限られた生徒だけでなく、多くの生徒にそういった機会を提供してけるとさらに充実したものになっていくと思われる。</p> <p>・達成出来ている所と出来ていない所が明確になっていて評価の意義を感じる。</p> <p>・全体的には、達成度の結果が前年度より上がっている項目が多く、時間をかけて課題に取り組み努力されたのだろうと思う。</p>					